

社会と教育界を結ぶ

月刊 先端教育

INNOVATIVE LEARNING

シスコシステムズ×月刊先端教育 特別企画

教室の壁をこえて、 無限に広がる学びを

デジタル スクール ネットワークが繋ぐ
探究学習・オンライン教育・地域連携・国際交流



シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー
<http://www.cisco.com/jp>

詳細・お問い合わせ

デジタルスクールネットワーク ウェブページ
<http://www.cisco.com/jp/go/dsn>



お電話でのお問い合わせ
平日10:00-12:00, 13:00-17:00
0120-092-255



Photo by New Africa/Adobe Stock

教室の壁を越えて無限に広がる学びを提供 シスコ デジタル スクール ネットワーク(Cisco DSN)

教育者と学習者を安全なコラボレーション空間でつなぎ、学校の枠を超えて行う遠隔授業、学生間交流、また、教員同士のコミュニティなどを実現する、無償のデジタル ラーニング プラットフォームです。

社会の変化とともにデジタル化が急速に進むいま、これからの時代を生きる子どもたちが学ぶことは、教室の中だけに留まりません。対面・遠隔両方のコミュニケーション能力や、自分と異なるコミュニティを受け入れる多様性、自ら発信する力、そしてそれらを支えるICTスキルなどが求められています。全国で整いつつある「GIGAスクール構想」のICT環境を活用したあらたな学びのコンテンツとして、シスコはデジタル スクール ネットワークを通して、子どもたちに新しい体験や気づきを、そして教育現場に新たなコミュニティをご提供します。

シスコ デジタル スクール ネットワークはCisco Webex上で提供される小中高の教育者と学習者をCisco Webex上でつなく、無償コミュニティプログラム。オーストラリア／ニュージーランドを中心にアジア太平洋地区の5カ国(100校以上)がメンバーとして参加しています。日本国内でも参加校の登録を2018年9月より募集しており、多くのプログラムを体験していただいています。

国内参加校

- ・合同授業
- ・共同創作
- ・公営塾での受験対策



自校

- ・課題解決授業
- ・フィールドワーク
- ・保護者説明会



Digital Schools Network

コンテンツ プロバイダー(国内)

- ・オープン キャンパス
- ・オープン講座
- ・キャリア体験学習



海外参加校

- ・語学授業
- ・文化交流
- ・姉妹校連携



シスコ

- ・サイバー セキュリティ スカラシップ
- ・プログラム開発授業支援(予定)

コンテンツ プロバイダー(海外)

- ・参加大学のオープン講座
- ・特別科目(ミニ単位取得)
- ・留学生との交流

参加方法はとても簡単です

ウェブページはこちら (<http://www.cisco.com/jp/go/dsn>)



- ① Webexのアカウントを作る(無償版からのスタートも可能です)
- ② 必要なWebexのアプリをダウンロードいただく
- ③ デジタルスクールネットワークの規約を確認し、必要事項を登録フォームに入力する

ご登録いただきましたら、担当者よりご連絡をさせていただきます。

Webex Teams(チャットツール上)では日本の参加校のみのコミュニティが運営されており、参加可能な授業が企画されるとそのコミュニティに授業に関する情報が投稿され、各校から参加表明していただくことができます。いずれの企画も参加は自由となっておりますので、興味や日程に応じて、都度、参加するかどうかを決めていただくことができます。また、ご自身の学校での授業をデジタルスクールネットワークのコミュニティへご提供いただくことも歓迎いたします。他校の生徒との交流を通じた活動、より多くの生徒への学びの機会の提供につながります。

また、デジタルスクールネットワークは、生徒のためだけではなく、教師の方向けのコンテンツもあります。

Cisco DSNを活用した授業の一例

サイバーセキュリティ



参加した3校(広島県立大崎海星高校、北海道岩見沢緑陵高校、島根県立隠岐島前高校)の生徒へシスコ従業員がサイバーセキュリティの講義を実施。サイバーセキュリティを身近に感じられるような高校生の日常にも関連性の高いトピックで授業を行い、最後の質問タイムでは「来年の5Gが始まるとセキュリティはどう変わるの?」など先を見据えた質問なども。

パラアスリート



パラ卓球選手でシスコ社員の渡邊剛氏の講演を、4つの高校向けに実施。Cisco Webex Board を活用し、アスリートとして大切にしている食事や睡眠、障がい者としての日々の生活などを講義。質疑応答では、「日本の障がい者の受け入れ態勢はどう思うか?」、「渡邊さんが前向きに生きていく姿に感銘を受けました」という感想も。

PBL(問題解決型)授業



少しずつ学校現場で定着してきたPBL授業。その発展版としてオンライン形式でジグソー法を用いた探求学習を実施。生徒は学校や地域を超えて、グループワークを体験。高大接続改革、新大学入試改革など高校生の視点で社会の変化を理解した上で、探求学習がなぜ必要なのかについて、自身の考えを発信できるようにするという目標の授業。深い思考と、さらにそれを言語化する難しさにも学びを得た。

今後は小中学生のための授業や、国際交流の場の提供も予定しています。

全国の高校教員が参加 新たな学びの可能性を探る

地域連携は“弱いつながり”がカギ ICTを活用した探究学習を

シスコシステムズが「教室の壁を越えて無限に広がる学び」の実現を目指す取組み『デジタルスクールネットワーク』。2021年3月6日に「新しい学力観を養うためにICTはどのような役割を果たすか」をテーマに、高校教員らが参加したオンラインワークショップの様相をレポートする。

国を超えた交流授業を促進 デジタルスクールネットワーク

スタンフォード大学の学生ベンチャー発のネットワークベンダーであるシスコシステムズ。「人々の働き方、生活、娯楽、学習のあり方を変える」をビジョンに、各分野をテクノロジーの観点から支えている。

文科省のGIGAスクール構想により、学校で1人1台端末環境の学びが普及する中、端末のスムーズな利活用に向けたネットワーク環境の整備は喫緊の課題だ。

同社は、クラウド管理型 Wi-Fi 「Cisco Meraki MR シリーズ」、クラウド管理型スイッチ「Cisco Meraki MS シリーズ」、クラウド型セキュリティサービス「Cisco Umbrella」、ウェブ会議ツール「Cisco Webex」等を展開。海外及び日本でシェアNo.1のネットワークベンダーとして、教育現場に最適なソリューションを提案している。

クラウドサービスである「Cisco Webex」の利点は、新しいリソース

をユーザーがすぐに享受できること。直近では「Webex Assistant」という最新機能が実装され、録画すると自動的に議事録を作成できる。

また、英語のインプットに対しリアルタイムで字幕をつけられる機能（日本語は5月実装予定）やボディアラゲ機能など、授業をよりインタラクティブにする機能も実装され、海外交流やオンライン授業をよりスムーズにするために活用できる。

大学のキャンパスから生まれたシスコシステムズ。同社のテクノロジーを使う世界の学校や教育関係者を結び付けることで、様々な体験、学びを深めていく取組みとして開始したのが「デジタルスクールネットワーク」だ（図1参照）。現在、オーストラリア、インド、シンガポール、日本を中心に参加者が集まり、各国で様々な交流授業を行っている。

日本における取組みは2018年9月、全国5つの高校からスタートし参加校は年々増えている。シスコシステムズでは、遠隔教育コミュニティの形成と加速を目指し、「Cisco Web

ex」などの利用方法のアイデアディスカッション、その他プログラム運用に関するフィードバックなどのトライアルを実施している。

ワークショップに先立ち、「デジタルスクールネットワーク」の取組みを説明するシスコシステムズ公共事業推進本部 部長の田村信吾氏は「来年度は国際交流に力を入れていく予定です。オーストラリアでは、1600校以上の高校生に『Cisco Webex』を活用いただいていますので、日本の学校とうまくマッチングしながら交流授業を作っていきたいと考えています」と話す。また、教育現場では、コロナ禍の影響もあり、オンラインとオフラインのハイブリッド授業の必要性が高まっている。

「ハイブリッドの中で、オンラインとオンサイトをいかにうまく使っていかかという部分を、教育現場の皆さんと作っていききたいと思っています」

授業の新しい在り方について 地域を超えたコミュニティで模索

ワークショップでは「新しい学力

観を養うためにICTはどのような役割を果たすか」をテーマに、全国各地の高校教員や教育委員会などから、参加者が集った。

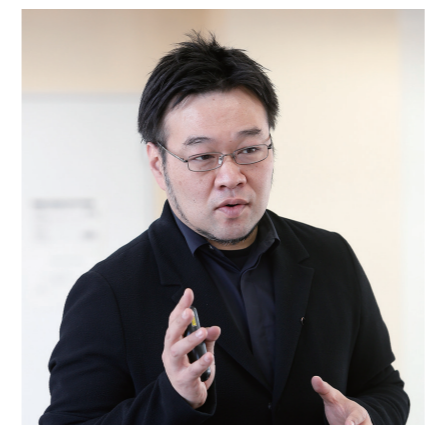
講師に産業能率大学の藤岡慎二教授を迎え、オンライン形式で、課題解決型入試問題を教員自身が体験。新たな授業スタイルとしてのICTの利活用や、探究学習の在り方等をディスカッションした。

冒頭、藤岡教授はワークショップの狙いや大学入試改革の状況等について説明した。

「学力の3要素^{*1}を踏まえ、大学入試が変わってきています。新傾向の問題を体験していただくことで、オンラインでのFD（ファカルティ・デベロップメント：教員の能力開発に向けた取組）の可能性と、今後の授業の新しいあり方を、地域や立場を越境したコミュニティで模索していきたいと考えています」

^{*1}①知識・技能の確実な習得、②①を基にした思考力、判断力、表現力、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を指す。

文科省が進める高大接続改革は「学力の3要素を踏まえた上で、学



藤岡慎二 産業能率大学教授

図1 教育ICTへの取組み

～シスコデジタルスクールネットワークプログラム (DSN) の活動例～

学校×学校	島×島	学校×企業	学校×人
龍谷中学校（佐賀）と玉川聖学院中等部（東京）のSDGs遠隔交流	伊豆7島をテレビ会議で結び学生同士、教師同士を結ぶ	Education First社による、小中高向け語学トレーニング ※EF東京2020公認教育プログラム	全国の高校生向けに、北方領土問題について元島民、根室高校生徒と遠隔授業

出典:シスコシステムズ

大学の学びを繋げる取り組みだ。これが、学力の3要素を多様な視点で評価する、大学入試改革にも繋がっている。

また、新学習指導要領が重視する「主体的・対話的で深い学び」は、学力の3要素を育む上で大切だと言われている。これを実現する方法が探究学習だ。しかし、いまだ「調べ学習」と「探究学習」の違いが理解されていない現状がある。

「問いを立てられるかどうか、探究学習のスタートです。収集した情報を整理分析し検証してまとめただけでは、調べ学習の域を出ません。答えのない問い立て、振り返りがあるかどうか、調べ学習と探究学習の違いとなっていきます」

「知識・理解思考」、「論理的思考」、「創造的思考」という3段階の領域に対し、「単純」「複雑」「変容」で分け、計9つのマス目に区切ることで思考力を分類する〈思考コード〉

で見ると、これまでのセンター試験では、例えば「フランシスコ・ザビエルは何をした」という「知識・理解思考」が問われてきた。

今回の大学入学共通テストでは、記述式問題は見送られたが、先の例でいえば、「キリスト教の伝来が当時の日本に及ぼした影響は何か」といった「論理的思考」まで問いたいというのが当初の狙いだった。さらに、各大学の選抜試験では「あなたがザビエルなら布教のために何をするか」といった「創造的思考」まで問う問題が、今後増えていくことが予想されると藤岡教授は指摘する。

「探究学習では、自身で問いを立て、実行していくなかで、『君ならどうする』『なぜそうするのか』と幾度も聞かれます。つまり、探究学習を通じて『論理的思考』や『創造的思考』は育まれるのです」

藤岡教授が教鞭をとる産業能率大学では今年、思考力を総合的に評



ワークショップの中で「探究学習」と「調べ学習」の違いを解説する藤岡教授

価値するため、スマホを使って情報を調べながら問題を解いていくという入試問題を導入した。

知らない知識はネットなどで調べることが前提に、今の社会は動いている。コロナ禍を含め、先の見えない状況の中で「知識を覚えるだけでなく、知識を活用して未来を創造できる人間」を大学としては育成したい。

こうした各大学のアドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）に即した入試問題は、今後増えていくことが予想されると藤岡教授は指摘した。

新たな傾向の入試問題にトライ 多様な視点の重要性に着目

ワークショップでは、産業能率大学で行われた新しい入試問題（サンプル問題）を、教員自身がオンラインで体験。その後、2チームに分かれ、回答や解き方をチームごとに共有。さらに、この問題を解くために有効な高校生の行動について考えた。

設問は「2040年に存続の危機の状況に陥っている未来島に対し、ど

んな施策をいつ講じれば島の未来を変えることができたと思うか」といった内容（図2参照）。

仮想上の日本の離島を題材に、1950年代～2040年までの歴史の変遷や人口推移などの資料・情報があり、さらに必要な情報をスマホで調べることが可能だ。

実際90分で解くところを、ワークショップでは、10分で体験。それぞれが「思ったよりも難しい」「回答が『農産物のブランド化』などに偏る傾向がある」というのが参加者の印象。問題を解くために必要な高校生の行動については「地域活性化について、多様な視点で考えられる思考力が必要」、「スマホで何かを検索する以前に、そもそも、何が課題か、何が問題かの仮説を立てる必要がある」といった意見が出た。

ワークショップ後はKPI（keep/problem/try）シートで、参加者自身が学校でやってきた教育活動を振り返り、「続けたいこと、問題だと思うこと、挑戦したいこと」を議論。参加者からは「探究学習における地域との連携、外の人と関わり視野を広げることが重要だ」といった意見などが活発に交わされた。

図2 未来構想式サンプル問題

未来構想方式 サンプル問題

みなさんは、今、2040年2月17日の日本にいます。以下の課題文は、日本のある地域の1950年代から2040年までの歴史的な変遷を記しています。図表を参照しながら課題文を読み、設問に答えなさい。

・[未来島の概要]
未来島は、瀬戸内海に浮かぶ離島である。島から本土の港まではフェリーで約30分、港から地方空港まではバスで約30分の距離にある。島から県庁所在地(政令指定都市、人口:約110万人)までは、フェリーと電車を乗り継いで約2時間を要する。島の面積は50平方キロメートルで、瀬戸内海独特の温暖少雨な気候である。

・[未来島の歴史]

1950年代: 未来島は造船業が盛んで、小さな島に造船会社が12社もあった。造船は多くの部品を必要とし、島には部品工場も数多くあった。仕事を求めて多くの人が島に移り住み、最盛期には2万人を超える人が島で暮らしていた。毎週のように船の進水式が行われ、多くの見物人が集まり、島はいつも祭りのように活気があふれていた。



参加者の教員が取り組んだ産業能率大学のサンプル問題の一部

出典:藤岡教授提供

地域連携型学習の意味を考える ゆるい繋がりが思考を深める

最後は、藤岡教授から、「地域連携の意義」について振り返りがされた（図3参照）。探究学習においてよく使われるのが地域課題を解決するという、地域連携型の学習だ。

藤岡教授は「地域と連携する意味は、課題というコンテンツだけではなくネットワークに大きな意義があります。学校外との繋がりが生徒の問題意識や深みのある思考力を育てていくのです」と話す。

「地域課題を地域と深掘りできる」ということも一理あるが、アインシュタインの言葉に“問題が起きた時の状況で、問題は解決できない”というのがある通り、地域に深掘りできる情報、素材があれば、課題は既に解決しているとも言える。

「私が考えるのは、コンテンツではなくネットワーク。ソーシャルキャピタル^{※2}の話になりますが、特に“弱いつながりからなるソーシャルネットワーク”が、多様な幅広い情報を素早く、効率的に遠くまで伝播させるのに向いており、新鮮かつ多様で幅広い情報を生徒に絶えず提供すると考えています」

※2…人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴のこと。

一般的に高密度で繋がっているネットワークの場合、似たような人として繋がることができず、結果として似た情報だけが閉じたネットワークで回りがちで、情報の伝播という意味では非効率だ。

一方、希薄なネットワークはブリッ

図3 探究学習における地域連携の意義について

- 探究学習やPBLで、地域と連携する意味は、生徒と地域が「弱いつながり」を構成することで、地域での課題を発見することのみではない。
- 地域の人々(学校外)と弱いつながりを構築することで、「多様な、幅広い情報を、素早く、効率的に、遠くまで伝播させるのに向いている、弱いつながりからなるソーシャルネットワーク」は、生徒本人を問いに導く手がかりになる情報を与える「伝手」になる。
- つまり、いかに地域連携において、「弱いつながりからなるソーシャルネットワーク」を構築できるかで探究学習やPBL、問の質は変わる。
- 地域は地方だけではなく、都会でも弱いつながりを構築できれば、生徒を問いに導く。
- 弱いつながりを維持し、コントロールしていく上で、地域と学校をつなぐ「コーディネーター」の存在は重要。

出典:藤岡教授の資料を基に編集部作成

ジが多いため、外からの情報が多く入り情報の伝播も効率的だという。さらに、強い繋がりをより簡単に作れるため、より遠くに伸びやすい。地域との連携は、学校における高密度なネットワークから、弱いつながりからなるソーシャルネットワークへ移行する行為だと言える。

「今回の入試問題では良質な回答をできる子は、明らかに観点が多く、深いでしょう。探究学習で様々な大人と出会い、議論してきたことが生きてくるでしょう。探究学習における、生徒の裏にあるソーシャルネットワーク、ソーシャルキャピタル、繋がりが思考を深め、答えを洗練させていくのだと思います」

地域連携においては、コンテンツとネットワークのバランスをどうとっていくかが重要となる。さらに、一度弱いつながりを構築した後に、それをどう維持していくかも課題となる。そこで藤岡教授は、コーディネーターの重要性を挙げる。

「地域と学校をつなぐコーディネーターの存在は重要で、コーディネーターには、つながりをコントロールしたり、維持したり、場をつくっていく役割が今後増々期待されていくと思います」

地域の人と学校外の弱いネットワークを構築することが、問いを立てるてがかり、答えを導きだす糧となる、新鮮かつ多様で幅広い情報を絶えず提供する。そういう意味では、この活動は、地方だけでなく都会でも可能だ。

「自分自身の多様な広い情報を素早く効率的に遠くまで伝播させる『弱いつながり』を、地域連携でいかに作っていくのか。これで、探究学習、PBLなどの質は変わっていくと思います。こうした弱いつながりを学校と地域でどんどん作っていくために、私自身も貢献できればと思います」

その「弱いつながり」を広く構築するのに、ICTは大きな役割を果たすだろう。

オンライン教育をテーマに教育関係者が意見交換

海外の学校や専門家らと繋がり 学びを深めるオンラインの可能性

コロナ禍で進んだ教育のオンライン化。教育現場で新たな学びの模索が続く中、シスコシステムズの「デジタルスクールネットワーク」は、世界の学校や専門家をつなぎ、教室の壁を越えた学びを展開。本誌では様々な立場の教育関係者が意見を交わし、オンライン教育の可能性を探った。

学校や教育関係者をつなぎ エクスペリエンスの向上を目指す

Cisco（シスコ）の略称で呼ばれるシスコシステムズは、米・スタンフォード大学、学生ベンチャー発の世界最大のネットワークベンダー。同社の提供するウェブ会議ツール「Cisco Webex」は、スマホやPCなど様々な端末から使えるクラウドサービスとして、医療やG7などの国際会議をはじめ、学校などの教育機関でも多く採用されている。

シスコが、同社のテクノロジーを使う世界の学校や教育関係者を結び付け、革新的なソリューションを共有することで、エクスペリエンスを高めていく取組みとして開始したのが、「デジタルスクールネットワーク」だ。小中高のユーザー向けに、「Cisco Webex Teams」上で無償コミュニティプログラムを提供。参加校は国内だけでなく、タイムゾーンの近い国々の参加校とも交流できる。また、コンテンツプロバイダー（大学などの高等教育機関）から、先進的な授

業の機会を得ることも可能だ。

現在、オーストラリア、ニュージーランドを中心にアジア太平洋地区の5か国（100校以上）がメンバーとして参加し、日本でも2018年9月からメンバーを募集してきた。

この1年、コロナ禍で日本でも急速に教育のオンライン化が進んだ。「デジタルスクールネットワーク」参加校では、オンラインをより有効に活用するための、様々な取り組みがなされてきた。

今後、オンラインのさらなる定着化が予測されるなか、教育現場はどのように変化していくのか。シスコシステムズ公共事業 事業推進本部 部長の田村信吾氏をファシリテーターに、「デジタルスクールネットワーク」に携わった、産業能率大学教授・藤岡慎二氏、宮崎県立飯野高校指導教諭・梅北瑞輝氏、一般財団法人こゆ地域づくり推進機構（通称「こゆ財団」）教育イノベーション推進専門官・中山隆氏の三者が集まり、この1年の教育現場の取組みと変化、オンラインのメリット・デメリット、シ



中山隆 一般財団法人こゆ地域づくり推進機構 教育イノベーション推進専門官

スコの展開する「デジタルスクールネットワーク」への期待などについて、それぞれの立場から意見を交わした。

緊急事態宣言から1年 各教育現場での取組みは

宮崎県新富町で教育推進コーディネーターとしてICT活用も含めた教育活動の推進を行う、こゆ財団の中山氏。緊急事態宣言の発令された2020年4月以降、県全体でのICT勉強会、研修会を4月から5月の間に急遽実施したという。「先行してICTを活用してきた飯野高校の事例



梅北瑞輝 宮崎県立飯野高校指導教諭

などを紹介しながら、小中高向けにオンライン勉強会・研修会を行い、県全体でトラブルを乗り越えていく気運を高めていきました」（中山氏）。

一方、「デジタルスクールネットワーク」参加校でもある宮崎県立飯野高校では、3月の休校措置と同時にICTの活用を検討。生徒との面談で自宅の通信環境を確認すると同時に、若手教員を中心にオンライン活用法を共有、それを全職員に研修した。

飯野高校の梅北氏は「オンラインを先生も生徒も使えるようになり、学校や自宅にいながら外の人と繋ぐことが可能になったことは、非常に大きな成果かと思っています。これまでの活動に+αのものを加えることができた1年だったかと思っています」と話す。

一方、高等教育機関である大学。産業能率大学と北陸大学で教鞭をとる藤岡氏は、2020年5月、完全オンラインの状況でアクティブラーニングを試みた。

「学生たちがデジタルネイティブ世代なこともあり、オンライン上でディスカッションしたり、共同作業をしたり、かなり色々なツールを組み合わせながらアクティブラーニングができ



藤岡慎二 産業能率大学教授

たかなと思います」（藤岡氏）

ハイブリッド時代の メリットとデメリット

2020年、年間を通じてオンライン授業を行ってきたという藤岡氏。学生側からは「全員が最前列にいる状態で資料が見やすく集中しやすい」「通学時間がいらなくて良い」といったポジティブな声が上がっているという。一方で、グループワークに関しては、生徒のやる気に関わらずランダムにグループが分かれるため、熱量の差があり、やる気のある学生にとってはつらいといった意見も出た。

北陸大学での地域活性化をテーマとした授業では、各地域の課題に対し学生の考えたソリューションをオンラインでプレゼンし、実際に地域の人々とディスカッションする授業なども行った。

「金沢にいながらにして、北の話も南の話も聞けるため、比較検討できるという点で、非常に効果的だったかと思っています」（藤岡氏）

オンラインでの教員研修を行ってきた中山氏は「100人を超える新富町内の小中学校の教員全員が、自分の



田村信吾 シスコシステムズ合同会社 公共事業 事業推進本部 部長

学校で研修を受ける環境が整うのは、リモートツールのメリットの1つです」と話す。また、埼玉県、宮崎県、島根県と合同で「Cisco Webex」を活用した探究活動の発表会なども企画したが、オンラインで繋がることで、旅費や宿泊費の削減ができ、こうしたイベントへの学校参加のハードルは各段に下がる。

「テクノロジーを通じて地域、世界を越えてつながることができます。特に『Cisco Webex』を使うメリットは国際交流ができることかと思っています」（中山氏）

飯野高校の梅北氏は、オンラインでの授業を始めたことで、小さなグループ単位で専門家からレクチャーを受けたり、地域外のプロフェッショナルに話を聞く機会が増えたという。さらに、学習の個別最適化という面でも、生徒たちの学びのスピードに合わせ、個別に生徒たちが学びを取りに行ける環境ができ始めたという。

「これまで教員対生徒、1対40でやってきた授業を1対1に近づけていく。学習の個別最適化を加速させる基盤が、この1年でできたかと思っています」（梅北氏）

国も分野も越境 無限に広がる学びを提供

国内外、様々な地域の子どもたちや人々をつなぎ、それぞれの学校での学びを深めていくことが「デジタルスクールネットワーク」の狙いの1つ。

「サイバーセキュリティやLGBTなど、教育者がリーチできない分野の人々をつなげてもらえる。複数校でシェアできる環境を作ってもらえていることは、すごくありがたいと思っています」と中山氏。

さらに、同時多発的に北海道から九州、沖縄までやり取りができることは、子どもたちの学びの幅を広げる。

「この1年、地域を越えた交流が、子どもたちの新たな気づき、価値観、感情を生み出すことが顕著にみられました。これまでは地域軸で見えていましたが、今後は国を越える、国際交流で世界とつながることが重要かと思えます。それをつないでいただけるのが『デジタルスクールネットワーク』の魅力かと思えます」（中山氏）

飯野高校では、この1年、「Cisco Webex」を使い、英語の授業の時間に台湾の高校と交流を行ってきた。これまで地域を主体で活動していた子どもたちがオンラインで越境し海外とつながることで、「深い学び」を獲得できる。例えば、地域の課題解決をしようとする時には、地域だけを見るのではなく、外の世界、海外の事情を知り、そこを起点に課題解決策を考えていくことができるようになっていく。

オンライン化で海外とつながるといふハードルが低くなる一方で、こうした探究授業を支援する教員側のハー



飯野高校は英語の授業で「Webex Board」を使って台湾の高校と新型コロナウイルスをテーマにディスカッションを実施。オンラインが、国を超えた交流を生み、生徒は様々な学びを得る。

ドルは上がる。

「教員がファシリテーター、コーディネートの役割を担って、幅広い学びの中から出てきた子どもたちのアイデアと地域課題とをマッチングさせていくことが必要になっていくと思います」（梅北氏）

高等教育機関として小中高にコンテンツを提供する立場の藤岡氏は、「現在、全国的に先生方が『探究の授業をどうするか』、やり方も含めて悩まれている状況です」と話す。全国5,000の高校を全て回るのは難しいが、オンラインでつなぐことで、情報の共有やコミュニケーションをとっていくことはできる。

「去年は高校生に向けた探究の授業を実際にオンラインで行いました。また、海外の学校とコラボした探究授業、アクティブラーニングを紹介することで、授業の組み立てのきっかけづくりができればと考えています」（藤岡氏）

飯野高校で行ってきた台湾との交流では、「Cisco Webex」の同時翻訳の機能を活用し、世界共通の

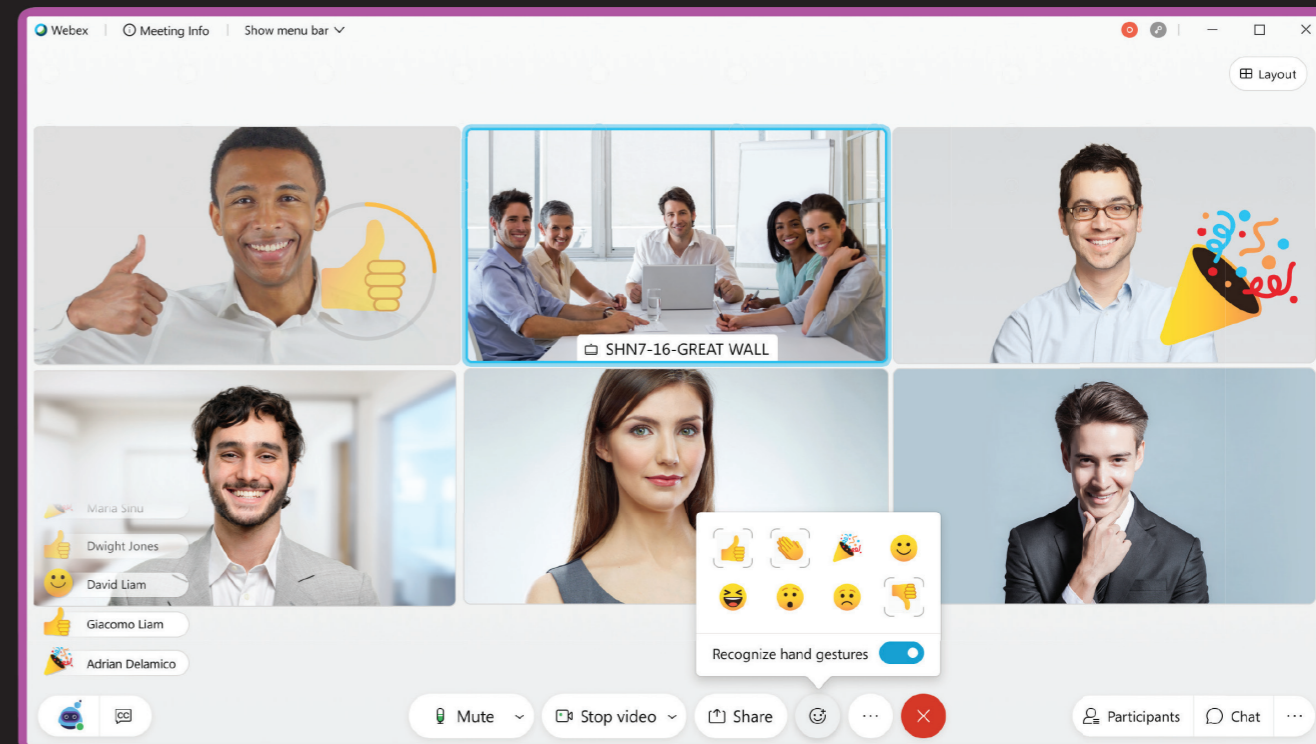
問題である新型コロナウイルスについて、台湾の高校生とディスカッションを行った。

「共通の課題である新型コロナウイルスに関し、違う国、違う文化の子どもたちと意見を交わせたことは、非常に大きな経験となりました。こうした活動を、ぜひ、ニュージーランド、オーストラリアと広げてやっていければと思います。大人数でも『Webex Board』を使って対話できることも『Cisco Webex』の強みかと思えます」（梅北氏）

テクノロジーにより、個別の学びにあわせ、学校や地域にないリソース、コミュニケーション相手にリーチできること。地域や国を越えた交流が可能になることなどが、オンライン授業ならではのメリット、学びの可能性であると言える。

ディスカッションを終え、シスコの田村氏は「『デジタルスクールネットワーク』では、今後も幅広いコミュニティの形成を支援し、国際交流についてのチャレンジも積極的にしていきたいと思っています」と締めくくった。■

Cisco Webex



オンライン授業から行事の配信までWebexで効果的

- Webex Assistant 英語→日本語の翻訳機能で幅広い活動をサポート
- Sildoで簡単リアルタイムアンケートやQ&Aで満足度向上
- ノイズ除去機能を使って授業やミーティングに集中
- 画面レイアウトをカスタマイズして、参加者と共有し、臨場感と集中を
- 簡単で、使いやすくなったブレイクアウトルームでグループワーク
- ブラウザから視聴可能な、ウェブキャストモードで行事や式典の簡単配信
- Webexビデオ端末1台だけで、高品質な授業の提供が可能
(ZoomやMicrosoft Teamsでも利用可能)

教育機関向けの特別プラン
Cisco Webex Education Offerはこちら

